

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350307

研究課題名(和文) ジャンルの概念を育てるESP教授法を用いた教材作成モデルの構築

研究課題名(英文) Establishing a model for creating teaching materials based on a genre-based ESP teaching approach

研究代表者

照井 雅子 (TERUI, Masako)

近畿大学・理工学部・講師

研究者番号：70610525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：昨今グローバル化に対応できる高い英語力が求められるが、その獲得は容易ではない。一つの解決策として、本研究では、ESPが拠り所とするジャンルの概念を利用した方法を調査・検証した。研究方法として、(1)日本で日英翻訳を学ぶ英語力の高い社会人の翻訳データを分析し、(2)米国で通訳・翻訳を学ぶ社会人経験を持つ大学院生を対象に面接調査を行った。その結果、提案した方法は第二言語をプロフェッショナルとして磨くのに有効であることを示唆した。

研究成果の概要(英文)：Acquiring English language skills to cope with the globalization of communication is a challenging endeavor. As one possible solution, we conducted research on how the application of a genre-based approach, an underlying concept of English for Specific Purposes (ESP), might help English language learners refine their language skills. For the research, we analyzed Japanese-to-English translation data from translation trainees studying at an English-language school in Japan and interviews with U.S. graduate school students majoring in interpretation and translation. Our findings indicate the benefits of such a method, especially for professional training to refine the usage of a second language.

研究分野：ESP (English for Specific Purposes)

キーワード：ESP 専門分野別英語 コーパス ジャンル概念 教材開発 ELF 国際共通語 国際的情報交換

1. 研究開始当初の背景

ESP は、従来の英語教育では十分扱われてこなかった具体的な目的を特定した英語教育として、昨今、英語教育関係者のみならず専門分野の教員や産業界からも、その重要性が指摘され、注目されている。

しかしながら、大学英語教育全体を見れば、実施されている ESP の授業数も担当している英語教員の人数もまだ少ない。英語が堪能な専門分野の教員によって ESP が実施されている例も多いようだが、英語教員が専門分野の教員が行う ESP の実践報告を共有できる機会がないため、その実態はあまり明らかになっていない。ESP における英語教員と専門分野の教員との協力関係の重要性を深山 (2009) が指摘しているが、関係が築かれている例は少ない。

こうした問題は、大学英語教育で何を教えるべきなのか、ESP をどう扱えば良いのかという共通の認識が得られていなかったことと、汎用性のある ESP 教授法が普及しておらず、それゆえに、受講学生にとって適切で効果的な ESP 教材の開発が十分ではないことが原因だと思われる。

そのため、従来の学習内容や教材を用いて獲得できる英語力と、急激なグローバル化などの社会変化に伴って必要とされる英語力との齟齬が看過できなくなっている。特にこの点で ESP に期待が寄せられていると思われるが、この問題の一つの解決方法として、最新の ESP 教授法を用いた教材作成モデルを確立することがあげられる。

現在、学部 1-2 年生を対象とした“いわゆる ESP”として分類される大学英語教育向けの教科書には、受講学生の専門分野がそれに近い分野のエッセイやニュースを、しばしば学習用に平易に書き直した英文で読ませるものが多い。一方、学部 3-4 年生や大学院生対象の授業では、学術論文を読み、専門語彙を学ぶことが多い。ところが、学生が卒業後にグローバル社会で研究や企業活動を行う中で取り組まなければならない実際の Text (後述する「ジャンル」) は、教材で扱っているエッセイやニュースとは異なるもので、内容や難易度がかけ離れていることが多い。さらに、学生の実際の進路状況を見ると、学術分野に進む卒業生の割合が低いが、大学英語教育で学術目的の英語のみを扱い、特に専門語彙に着目させるだけの教授法を採用することには、バランスに配慮する観点から疑問が生じる。いずれの事例も、学習者が現在属しているか将来属することになる集団で繰り返し用いられる言語のニーズ分析に基づく教育が目指されるという ESP の観点 (Dudley-Evans and St. John, 1998) から、改善が望まれる。

ただし、ここで「学生が将来属することになる集団」を特定することの難しさが課題となる。学生は必ずしも大学で専攻した分野で就職するとは限らず、工学系のように、卒業後

の進路が比較的明らかな学生でさえ進路に幅があり、社会状況の急速な変化も伴って、卒業後の英語のニーズ分析を行うことが難しい (照井, 2011)。文系の学生は卒業後の進路が大学での専攻と異なることがさらに多く、卒業後に学生が属することになる集団の英語のニーズ分析はさらに困難になる。ESP のニーズ分析の難しさから、ESP のニーズを学生が何を学習したかという「Wants」と混同している教材が散見され、ESP の発展を妨げる一因ともなっている (Anthony, 2009)。

こうした状況下で、社会から広く求められている ESP を発展させるには、ニーズ分析の重要性を踏まえ、さらに「ジャンル」を概念として発展させた理論を普及させ、その理論に基づいた授業実践を拡大し、理論を十分に理解した上で実践を行える教員を養成することが急務である。

2. 研究の目的

本研究では、(1) 英語運用能力の高い社会人の日英翻訳データベースを構築し、当該データを詳細に分析することで、英語学習者がジャンルの概念を認識することによって学習効果が高まることを調査・検証する。また、(2) その知見を活かし、大学や大学院で利用できる汎用性のある ESP 教授法を確立させることである。

3. 研究の方法

下記(1)(2)(3)を通して、「ジャンル」を概念として発展させた汎用性のある ESP 教授法の有用性を検討する。

(1) 日本の英語学校で日英翻訳を学ぶ英語運用能力の高い社会人の日英翻訳データベース (コーパス) を日本で初めて構築し、以下の - のデータを比較参照・考察する。

受講生が提出した日英翻訳の際に参照した資料、その資料をデータベース化したコーパス内の語彙を分析するツールであるコンコーダンスーを使用して、語彙やコロケーションを分析した結果、日英翻訳の第一稿、同第二稿、講師による添削結果をデータ化する。

コーパスの構築については、Swales (1990) が提唱し、本研究分担者である野口が 2000 年代に発展させたジャンルやムーブに着目したジャンル概念 (野口, 2009; Noguchi, 2010 など多数) が現在の ESP 研究及び実践の主流となっている (寺内 et al., 2010) ことに基づいている。

(2) ジャンル概念を意識していない対象者として、米国の大学院で通訳・翻訳を学ぶ社会人経験を持つ大学院生に面接調査を行う。また、大学院の授業を非参与観察し、担当教員にも面接調査を行う。

(3) これらの結果を踏まえた教材を作成し、本研究担当者が大学 (院) 生を指導し、理解度を評価する。

4. 研究成果

ESP で取り上げるジャンルとは、社会の中である目的を持って行うコミュニケーションを指し、書かれたものと話されたもののいずれも対象とする。例えば研究者は、学会での口頭発表・論文・特許など様々なジャンルを利用して、情報を交換・共有している。こうしたコミュニケーションには繰り返し用いられる共通のパターンがある。本研究は、学習者にこのコミュニケーション（ジャンル）のパターンに注目させ、ジャンル「概念」を獲得させることで学習効果を高めることを検証することを狙いとしている。

ところで、学生は大学を卒業するまでは英語学習者かもしれないが、大学を卒業した後は、グローバル化が加速する社会で国際共通語（English as a Lingua franca, ELF）を使用して研究や企業活動を行うことが求められる。こうした状況では、ジャンル概念を獲得することによって、生涯にわたって自律的な英語学習が可能となると思われる。さらに、この概念を用いれば、ESP において重要だとされる英語教員と専門分野の教員との関係の構築においても、専門分野の教員からの協力も比較的得られやすく、専門分野の教員ではない英語教員が ESP を担当することの負担も軽減できる。

本研究グループの行った先行研究（Misaki et al., 2012）で日本の英語学校で日英翻訳を学ぶ英語力の高い社会人受講生に対し、「ジャンル」概念に基づいた翻訳アプローチを導入したことを示した。具体的には、野口（1997, 2003）に基づき、ジャンルの目的（Purpose, P）、情報の受け手（Audience, A）、伝えられている情報（Information, I）、そのジャンルの言語の特徴（Language features, L）を観察し（Observe, O）、ジャンルやムーブの特徴を分析し（Classify, C）、対象言語に翻訳する際に、それらの特徴をどう活かすかの仮説を立て（Hypostatize, H）、その仮説を実際の翻訳に応用する（Apply, A）という PAIL 及び OCHA アプローチを繰り返すことでジャンル概念を育むというものだ。

これをさらに分析・検証した結果として、次の研究成果が認められた。

（1）ジャンル概念を育みながら、当該受講生には、翻訳対象言語によって書かれたジャンル文書を集め、データベース化したコーパスを作成するよう、また、各受講生が作成したコーパス内の語彙を分析するツールであるコンコダンサーを使用して、語彙やコロケーション、英文法の使用法を分析するよう指導した。その結果、当該受講生たちは、翻訳の第1稿では気づいていなかった、対象言語においてより適切な語彙に気づいて第2稿で使用したり、第2稿では第1稿よりも適切なコロケーションを用いたりできるようになった。また、第1稿で見られた文法の誤りを第2稿で自ら修正したりできるようになった。例えば、学会発表の一つでは、受講生

が基点となる日本語では同じような意味と捉えられることの多い demonstrate/illustrate/indicate/suggest が対象言語のジャンルでどのように使用されているかを分析し、その分析結果をどう翻訳の第2稿に取り入れたかについて示した。こうした事例の積み重ねにより、ジャンル概念が定着していることが確認できた。（学会発表および書籍）

（2）上記のコーパスを活用した分析と並行して、当該受講生たちは毎週の授業において、ほかの受講生たちによる翻訳文と自分の翻訳文を比較することにより、翻訳過程や結果には様々な問題が含まれ、翻訳結果に違いがあることに自ら気づいた。授業内で講師を交えて議論することで、自他の翻訳を客観的に批評し、より良いものに校正する力も育んだ。（学会発表 および書籍）

（3）本研究で構築した日英翻訳データベース（コーパス）の - のデータ（受講生が提出した日英翻訳の際に参照した資料、その資料をデータベース化したコーパス内の語彙を分析するツールであるコンコダンサーを使用して、語彙やコロケーションを分析した結果、日英翻訳の第一稿、同第二稿、講師による添削結果を分析したところ、例えば、ジェネリック薬品の公的説明、幹細胞作成ハンドブック、日本の有名な神社の公式ウェブサイトの翻訳で、ESP のアプローチを用い、受講生によるコーパス分析とその応用、対象言語の参照文献を多数分析することや、授業内の講師を交えた受講生間の議論によって、英語ライティングにおいて日本人には難しいとされる冠詞を適切に使用できることが示唆された。（学会発表）

（4）日英翻訳過程で課題の一つが、原文の日本語が冗長な場合にどう英語に翻訳するかという手法にある。本研究では、ジャンル概念に基づいた翻訳モデルとして、対象とする言語（英語）で、ある目的を持って社会に流通している文書（ジャンル）に注目させることによって、この課題を乗り越える様子を分析した。具体的には、企業トップ（CEO）の挨拶文というジャンルにおいて、一文が長い日本語の原文を当該受講生がどのように英語に翻訳したかを分析した。さらに、当該企業が公式 HP で発表している同じ内容の英語の挨拶文と当該受講生の翻訳文を比較した。その結果、当該受講生たちがムーブ分析を含むジャンルの概念を活かすことにより、日本語の挨拶文では 234 字にも及ぶ長い一文を複数の短い文に分けて、より簡潔な英語に書き直すことができた。その際、より簡単な文章構造である単文を用いたり、一方で、意味の一貫性に注目し、あえて複文を用いて表現したりといった学習者の自律的な工夫が観察できた。（学会発表）

(5) 英語教育関係者の間でも ESP の「ジャンル」「ムーブ」「PAIL」「OCHA」の定義が理解されづらい面がある。本研究の成果報告を通じて、それらの ESP の重要な概念の具体的な例を示して定義の定着に努めた(学会発表)。例えば、ジャンルは学会発表時には週刊のニュースマガジンを例に、具体的な PAIL 及び OCHA アプローチを示した。また、商品・サービスの値上げを顧客に伝えるビジネス・レターを例に、日本語と英語ではムーブ(情報提示の流れ)が大きく異なることなどを示した(学会発表)。こうした取り組みを通じて、ESP の重要な概念の理解を促す一助とした。

(6) ジャンル概念を意識していない例として、米国カリフォルニア州モントレーにある専門職大学院の2年間の課程である「通訳翻訳科」を調査対象とした。当該専門職大学院は「原点をおさえた翻訳教育」「市場の変化に対応できる能力の養成」「実務と研究の相互作用」という教育目標を掲げ、修了後に専門家として即戦力となることを徹底的に目指した教育を施している。2013年2月に当該大学院を訪問し、多様な言語背景をもつ受講生6名に対し各80-90分の半構造化インタビューを行った。インタビューのすべてを書き起こし、グラウンデッド・セオリーを取り入れながら、テキスト分析ソフトを用いて、当該受講生の翻訳プロセスを分析した。さらに、日英翻訳および英日翻訳の授業を非参与観察し、それぞれの担当教授とも面接した。

受講生6名は20代後半から30代後半で、その内訳は、米国生まれの英語母語話者2名、マレーシア生まれの中国語母語話者1名、日本語母語話者3名であった。すべて社会人経験者で、日本語英語間の翻訳・通訳の経験も豊富である。学部もしくは大学院での専攻は言語・通訳・翻訳とは限らないが、全員学士号または修士号保持者である。日本語・英語間の翻訳・通訳の能力を磨いている当該受講生は、母語でない対象言語においても母語話者に近い(CEFRでC1もしくはB2.2レベル)言語能力を獲得していることがわかった。中国語母語話者も同様に、英語・日本語共に母語話者に近い言語能力を獲得していた。その結果、これほどの高い言語能力を持つ者は、ジャンル概念の助けがなくとも、両言語間において十分な産出が可能であると言える。しかし、平均的な日本人の英語学習者が当該受講生のような多様な言語背景を持ち、二国語もしくはそれ以上の数の言語で高い運用能力を獲得することは不可能に近い。そのため、逆説的ではあるが、ジャンル概念を獲得することで、たとえそれほど高い英語運用能力を持たなくとも、対象言語の産出において、ジャンルの特徴を捉え、ムーブに配慮したり、適切な語彙やフレーズを選択したりできるようになり、その結果として、産出内容が改善されることが示唆された。(学会発表)

(7) ジャンルの概念を取り入れた教授法を用い、工学系大学院1年生の男子学生1名に対する国際学会での発表の指導を通して、教材作成モデルの一助とした。

2015年9月より約半年間、当該学生の指導教員である工学系専門教員、英語母語話者の英語教員および日本人 ESP 教員が協力して理系英語プレゼンテーションの指導を行った。当該学生の英語力は理系学生としてはごく一般的なもので、指導を始めた際には、TOEIC®のスコアが400点に満たず、本人の英語に対する苦手意識も強かったが、国際学会で当該学生を第一著者とした口頭発表を行うことを当面の目標とした。それぞれの教員の専門を活かし、特に ESP のジャンル概念の知見を取り入れたことにより、2016年3月にシンガポールで行われた国際学会での英語での口頭発表を成功させた。

指導教員の工学系専門教員が研究発表内容を精査し、日本人 ESP 教員が研究内容を理解した上で当該学生に英語指導を行った。その成果として当該学生が英語で書いた研究概要や発表スライドを英語母語話者教員が校正し、口頭発表時の具体的な発音や、発話のリズム、強勢、イントネーション等の指導を行った。一見、役割は分担されているように見えるが、指導教員の工学系専門教員と日本人 ESP 教員が常に指導の場に同席しており、相互に確認し合って指導を進めた。これによって、専門分野独特の表現や日本語で書きたい(言いたい)内容の表現が聴衆や読者に正確かつ円滑に伝わる表現かを確認しながら英語に変換することが可能であった。この点がこの指導方法の一番の利点であると考えられる。具体的には、当該学生の専門分野の論文でコーパスを作成させ、コーパス内の英文要旨を色分けすることによってムーブを視覚的に理解させた点や、さらにコーパスから単語を抜き出して分析させることで研究概要に特有の表現とは何かを考えさせた後に、英語の研究概要を書き直させた点で、ジャンル概念を育てることが目指された。当該学生には日本語の研究概要の一文一文を英語に翻訳する傾向が当初見られたが、ジャンル概念を育てたことで、英語の研究概要や口頭発表の完成度を示すことができ、当該学生が属す専門分野のコミュニティのメンバーとしてふさわしい能力を持つことを示すことができる内容に改善された。(発表 および論文 および書籍)

<引用文献>

Anthony, L. (2009). ESP at the Center of Program Design. In 福井希一他(編著)(2009). 『ESP 的バイリンガルを目指して』. pp. 18-35. 大阪大学出版会.

Atsuko Misaki, Shoji Miyanaga, Masako Terui, Judy Noguchi. (2012). A genre-based approach to Japanese-to-English

translation for a professional training course. *Taiwan International ESP Journal*, 4(2), 81-96.

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages、ヨーロッパ共通言語参照枠) 2016年4月24日参照
http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Framework_EN.pdf

Dudley-Evans, T & St John, M. J. (1998). *Developments in English for Specific Purposes: a multi-disciplinary approach*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

深山晶子 (2009). 「専門教員との連携プロセスのノウハウ」. In 福井希一他(編著) (2009). 『ESP 的バイリンガルを目指して』. pp. 60-73. 大阪大学出版会.

福井希一・野口ジュディー・渡辺紀子(編著) (2009). 『ESP のススメ - 応用言語学から見た ESP の概念と必要性, ESP 的バイリンガルを目指して』, 大学英語教育の再定義大阪大学出版会.

Noguchi, J. (2010). Exploring ESP Frontiers: Systemic Literacy, Life-Long Learning, ESP Bilingualism. *Annual Report of JACET-SIG on ESP*, 12, 3-13.

Noguchi, J. (2003). Teaching ESP writing: OCHA in a CALL class. *Cybermedia Forum*, 4. Retrieved from <http://www.cmc.osaka-u.ac.jp/j/publication/for-2003/index.html>

Noguchi, J. (1997). Materials development for English for specific purposes: Applying genre analysis to EFL pedagogy. *English Teaching*, 52(3), 303-318.

Swales, J. M. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

寺内一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島茂(編) (2010). 『21世紀のESP 新しいESP理論の構築と実践』. 大修館書店.

照井雅子. (2011). 『EOPを志向する大学ESP教育 ジャンルの認識を育てる専門英語教育』. 大阪大学大学院言語文化研究科2011年度博士論文. Unpublished.

ラッセル秀子. (2013). 「事例報告: モントレー国際大学大学院翻訳過程: 翻訳「革命」期における翻訳者養成」. In 『立教SFR翻訳研究プロジェクト』(2013). pp. 41-46. 立教SFR翻訳研究プロジェクト.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

竹本剛志、鈴木直弥、高垣直尚、小森悟、

照井雅子、全球規模大気・海洋間運動量フラックスにおける強風域での抵抗係数モデルの影響、海洋理工学会誌、査読有、21(2)、2015、65-68

DOI: 10.14928/amstec.21.2_65

[学会発表](計 6件)

Takeshi Takemoto, Naoya Suzuki, Naohisa Takagaki, Satoru Komori, Masako Terui, George Truscott, Effect of Drag Coefficient Models concerning Global Air-Sea Momentum Flux in Broad Wind Range including Extreme Wind Speeds, The 18th International Conference on Environmental and Earth Systems Engineering, 2016年3月4日、シンガポール(シンガポール)

照井雅子、宮永正治、三崎敦子、野口ジュディー、ESPアプローチの日英翻訳コースへの応用、一般社団法人大学英語教育学会関西支部ESP研究会、2016年2月27日、立命館大学・キャンパスプラザ京都(京都府京都市)

Masako Terui, Atsuko Misaki, Shoji Miyanaga, Judy Noguchi, Qualitative Analysis of Two Translation Training Courses in Japan and the United States, The 3rd International Conference on Education and Social Sciences, 2016年2月20日、シンガポール(シンガポール)

Shoji Miyanaga, Atsuko Misaki, Masako Terui, Judy Noguchi, Contextualized Writing: Perspectives from Advanced Learner Translations, The JACET 54th (2015) International Convention, 2015年8月30日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

Masako Terui, Shoji Miyanaga, Atsuko Misaki, Judy Noguchi, Case studies of Japanese translator training: Tracing the development of the English article system, AILA World Congress 2014, 2014年8月11日、The Brisbane Convention and Exhibition Centre, ブリスベン(オーストラリア)

Atsuko Misaki, Shoji Miyanaga, Masako Terui, Judy Noguchi, Corpus discovery: Using corpora to raise language awareness in translation training, 2014年3月8日、Hong Kong Polytechnic University, 香港(中国)

[図書](計 2件)

Judy Noguchi, Atsuko Misaki, Shoji Miyanaga, Masako Terui, Walter de Gruyter, *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, 2016, 535

野口ジュディー、藤田清士、照井雅子、講談社、Judy先生の成功する理系英語プレゼンテーション、2014、143

6. 研究組織

(1) 研究代表者

照井 雅子 (TERUI, Masako)
近畿大学・理工学部・准教授
研究者番号：70610525

(2) 研究分担者

野口 ジュディー (NOGUCHI, Judy)
神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授
研究者番号：30351787

宮永 正治 (MIYANAGA, Shoji)
近畿大学・建築学部・講師
研究者番号：50467536

(3) 連携研究者

なし

(4) 協力研究者

三崎 敦子 (MISAKI, Atsuko)